

## 北村透谷の〈生命〉

——内部生命と「根本の生命」、そして〈死〉——

橋川俊樹

### 一 序章としての、透谷の死

朝日新聞の検索アプリで明治時代の「透谷」を調べてみると、総数は八件。その冒頭が「北村透谷氏逝く」（明治二七年五月十七日付）である。生前の北村透谷は有名とはいえない存在だった。平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』<sup>①</sup>が引用し指摘しているように、多くの新聞雑誌で無記載か短い訃報しかない中では、当時の「東京朝日新聞」はきちんとした死亡記事を載せている。

#### ●北村透谷氏逝く 女学雑誌及び文学界等にて

才筆家の名を博したる透谷北村門太郎氏は昨冬より神経病に罹り芝公園第二〇号第三号地（紅葉館の裏手）の僑居にありて養生中なりし所遂に一昨夜病ひの為に変死せり享年二十七、氏は神奈川県の士族にして性質純潔、学識宏博なりしに一朝病の為に夭折す嗚呼惜むべし

「変死」とあるが、自宅近くの公園内の木で縊死したのだ。「自殺」という表現を避けたのだろう。

同じように「自殺」を「変死」と言い替えた例が、夏目漱石の『こころ』（一九一四年）にある。先生の奥さんが学生の「私」にKのことを少しだけ打ち明ける場面である。

「先生がまだ大学にいる時分、大変仲のいいお友達が一人あったのよ。その方がちようど卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです」

奥さんは私の耳に私語くような小さな声で、「実は変死したんです」といった。それは「どうして」と聞き返さずにはいられないようないい方であった。

「それっ切りしかいえないのよ。けれどもその事があつてから後なんです。先生の性質が段々変つて来たのは。なぜその方が死んだのか、私には解らないの。先生にもおそらく解っていないでしょう。けれどもそれから先生が變つて来たと思えば、そう思われない事もないのよ」

（「先生と私」十九）

今と同じく「変死」というのは、尋常ではない死に方を指し、新聞紙上では行き倒れや殺人事件からんで使用されることが多い。明治時代の朝日新聞と読売新聞をネット検索で調べてみると、「縊死」の場合には自殺でも使用されている例がいくつかある。しかし、『こころ』の打ち明け話の場合は、「自殺」という言い方を避けるためにある。そのために、その「死」の傷ましさを不可解さを強調しているようにも受け取れる。

透谷北村門太郎の享年は満で言うと二十五歳、東京帝国大学（おそらく文科）を卒業間近だったKも似たような年齢設定である。時間的には、透谷が日清戦争の直前、Kは日清戦争の少し後という設定になっている。

こころで強引に透谷と『こころ』のKを結び付けようとしているのは、この二人の自殺動機が似通っていると考える

からだ。すなわち、

〈自分と自分の将来に対する失望・絶望〉、

〈思い描く理想と現実のギャップ〉

である。

北村透谷の自殺にKの自殺を重ねてみると、共通するのは〈脱俗・超俗〉と〈孤独〉である。

世俗を超越し孤高に生きようとする姿勢や思想が似ている。けれども夏目漱石が造型したKの場合、超俗・孤高であることを自らに課している風変わりな哲学青年で済ませられそうであるが、透谷の場合は妻と子が居て一家の稼ぎ手である、にもかかわらず超俗・孤高の姿勢を高く保っていたところが大きく違っている。

北村透谷という、忘れられた稀有な詩人・文学者を小説の形で世に出したのは、「文学界」同人の後輩・島崎藤村である。小説『春』は、『破戒』の次作として準備され、縁あって「東京朝日新聞」に明治四一年（一九〇八年）の四月から八月まで連載された。その前の連載作品が夏目漱石の『坑夫』であり、『春』の後がやはり漱石の『三四郎』である。漱石は、前年の明治四〇年、東京朝日に入社したばかりだった。

『春』は、「文学界」が創刊された明治二六年（一八九三年）、その夏から始まっている。この年の冬には透谷は精神を病み、年末には咽喉を短刀で突いて死のうとするが未遂に終わる。そして翌年五月、妻・美那子はいつもの散歩と思ったというが、夜の芝公園内の木に帯を掛けて縊死した。この間の透谷の動向について、時には透谷、それに美那子の内面に踏み込みながら、透谷の文章や書簡を引用しつつ、島崎藤村は詳細に描いている。美那子からの報知を受けて死体と向き合い、キリスト教式の葬儀と野辺送りに参加する主人公・岸本（藤村がモデル）の様子は特にきめ細かい。藤村にとって透谷の死が、どれほどの衝撃であったかが伝わってくる。

島崎藤村は、透谷の死後すぐに遺稿を整理して「文学界」に特別編の形で掲載し、翌年には『透谷集』を刊行し

た。これは部数が少なかったもので、明治三五年には春陽堂から『透谷全集』を刊行した。しかし、これだけでは透谷の名を広めるには至らなかった。藤村自身は『若菜集』刊行以後、浪漫派詩人として評価され、そのうち小説家に転向し、明治三九年（一九〇六年）に初長編の『破戒』が空前の話題作となった。そして世間の注目が集まる次作の内容を自らのルーツである「文学界」時代に定めた。そういう『春』執筆の裏面に、埋もれている「北村透谷」を世に知らしめようとする意図があったことは確かだろう。

『春』には、透谷の自殺理由について、次のような会話がある。

「そうかなあ、細君にもよく解らないかなあ」と岸本は元数寄屋町の家を出て、菅と一緒に歩きながら言った。

「何故青木君が亡くなったと言われたら、君だって困るだろう」と菅が言う。

「僕にも解らない」

「あまり接近し過ぎているものには、反ってよく解らないんじゃないか」

「さあ、そういうところが有るかもしれないね」と言って、岸本は考えて、「青木君が国府津で書いた文章があつたろう、ホラ——あれなぞを読んだ時に、僕はそう思ったネ、青木君は非常に濶い<sup>ひろ</sup>処を歩いてるなあッて。

ああいう処まで出て来ているんなら、死ななくっても可さそうに思うんだ」

青木は透谷のこと、菅は「文学界」同人の戸川秋骨。

岸本が言っている「国府津で書いた文章」は、明治二六年八月末から神奈川県国府津在前川村にある長泉寺内に住んでいた頃に書かれた文章という意味で、のちの回想で「一夕観」であることが分かっている。

その末尾を引いてみよう。

漠々たる大空は思想の広き歴史の紙に似たり。彼処にホーマーあり、シエークスピアあり、彗星の天系を乱して行くはバイロン、ボルテアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは泛々たる文壇の小星、吁、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に対して暫らく茫然たり。

「非常に濶い処を歩いてるなあ」と藤村が感じたのは、この、大空に瞬く悠久の「群星」に歴史上に輝く〈詩人〉たちを重ねて茫然自失する透谷の姿に対してだろうか？

それよりも「宇宙の中心に無絃の大琴あり」とした、少し前の「万物の声と詩人」（二〇月七日付「評論」一四号）の方が、意気盛んな透谷らしい「詩人」としての気概を示しているように思う。

「万物の声と詩人」の末尾を引いてみる。

宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍に來りて、己が代表する國民の為に、己が育成せられたる社會の為に、百種千態の音を成すものなり。ヒューマニチーの各種の変状は之によりて発露せらる。眞實にして容飾なき人生の説明者はこの絃琴の下にありて、明々地にその至情を吐く、その声の悲しき、その声の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。詩人は己れの為に生くるにあらず、己が囲まれるミステリー<sup>ミステリー</sup>の爲めに生れたるなり、その声は己れの声にあらず、己れを囲める小天地の声なり、渠は誘惑にも人に先んじ、迷路にも人に後る、なし、渠は無言にして常に語り、無為にして常に為せり、渠を囲める小天地は悲をも悦をも、彼を通じて発露せざることなし、渠は神聖なる蓄音器なり、万物自然の声、渠に蓄へられて、而して渠が為に世に啓示せらる。秋の虫はその悲を詩人に伝へ、空の鳥は其自由を詩人に告ぐ。牢獄も詩人は之を辞せず、碧空も詩人は之を遠しとせず、天地は一の美術なり、詩人なくんば誰れか能く斯の妙機を<sup>ひら</sup>開きて、之を人間に語らんか。

「詩人」は「神聖なる蓄音器」、「宇宙の中心」にある「無絃の大琴」が奏する音なき音に耳を傾け、人間に通じる「声」を与え、宇宙の神秘を伝える使命を持つ、と透谷は言う。

「宇宙の中心」には永久不死の「生命」がある。これより五カ月ほど前に書かれた「内部生命論」では、この「宇宙の中心」に時空を超えて存在する「根本の生命」に感応することこそ「詩人」の役割である、と論じた。

『春』の引用場面のあとに、「漫罵」（一〇月三〇日付「文学界」一〇号）への言及がある。『漫罵』では、今の日本と日本国民のありさまでは「真正の詩人」が生れるはずもなく、その価値もないと日本の社会全体を罵倒している。ゆえに「一々観」も「万物の声と詩人」も国民や社会ではなく、自然・宇宙に目を向けて、天地自然の「秘奥」にあり、宇宙の中心に存在する「秘宮」の扉を「秘鑰」で開ける使命をもつ〈真正の詩人〉たちに思いを寄せている。透谷自身も「詩人」の一人として、これら理想の「詩人」たちに近づこうと、煩悶・努力を積み重ねた。

しかし、北村透谷の残した数少ない詩・小説・戯曲には、その理想が十分に発揮されているとはいえない。

透谷の業績の大部分は、評論・批評にある。あるいは文学論・文学史論がその本領であったと言える。もし長生きをしていれば、たとえば『蓬莱曲』（一八九一年に自費出版）や、未完の草稿が残る『悪夢』のような戯曲・劇詩の方面で画期的な仕事を見せたかもしれないが、彼はその可能性を自殺によって放棄した。

北村透谷は晩年（まだ二十五歳だが）、なぜ「死」へ傾斜したのか？ その事実と、透谷が抱いていた〈生命観〉はどう結びつくのか？ 結局、彼は「理想と現実」のギャップを埋める努力を放棄してしまったのか？

これらについて微力ながら考察することとしたい。

このほかに重大なテーマ〈恋愛〉にも触れなければならないが、それは末尾近くで行なう。

## 二 人生と宇宙の中心にあるもの

北村透谷が「自殺」について書いた文章は三つある。

一つは、「復讐・戦争・自殺（仮題）」（明治二六年五月三日付「平和」一二号）。「自殺」の章の冒頭には、「苦惨の海に漂ふて、よるべなきさの浮き身となる時は、人は自然に自殺を企つるものなり。人は己れを殺すことを以て、己れの財産を蕩尽すると同じ様に考ふるなり」とある。自殺者は自分の命を絶つ行為を「己れの財産を蕩尽すると同じ様に」考えている、という指摘は興味深い。透谷自身の自殺はちょうど一年後のことになる。

それから、代表的エッセー「三日幻境」（明治二五年八月一三日・九月一〇日付「白表女学雑誌」）に、自由民権運動の老壮士・秋山國三郎に身の上を語る場面で、数度の自殺未遂を告白している。

この過去の七年、我が為には一種の牢獄にてありしなり。（中略）修道の一念甚だ危ふく、あはや餓鬼道に迷ひ入らんとせし事もあり、天地の間に生れたるこの身を訝かりて、自殺を企てし事も幾回なりしか、是等の事、今や我が日頃無口の唇頭を洩れて、この老知己に對する懺悔となり、刻のうつるも知らで語りき。

「三日幻境」には、『透谷全集』（勝本清一郎校訂・解説、岩波書店）の中で唯一といい、明るく楽し気な北村透谷の姿が描かれている。何度も自殺を企てたことを素直に打ち明けられる人とその家族・周囲の人たちの暖かさが透谷の心奥にまで浸透し、まさしく桃源郷のような「幻境」としてこの厭世詩人を癒している。

明治一八年（一八八五年）をピークに自由民権の政治運動から離脱した透谷が、その後の生活難、無謀な〈文学志望〉の途上で、どれだけ苦悩し「自殺」に迷いようとしたかが如実に伝わってくる。

けれども、この「自殺」指向はこの時点で過去のものとなっている。「三日幻境」が書かれた明治二五年の夏は、

透谷の人生が昇り調子の頃に当たる。「女学雑誌」の評論・文学担当として定着し、新雑誌の編集や教会関係の仕事などもあつて充実していた、また、文学的に尊敬できる後輩としての島崎藤村との交友が始まった頃でもある。政治青年だった過去の自分を整理する余裕が当時の透谷には出来ていたのだろう。

そして注目したいのが、「トルストイ伯」（明治二五年五月一八日付「平和」二号）の記述である。文豪トルストイの経歴をその宗教心の展開を中心に記述したもののだが、「自殺」指向を含めて北村透谷と重なる所が多い。

人生彼に向つて常に暗惻たり、何の為に、何の故に、人は世に生息するやと疑ひ惑ひつゝ、月日を暮らす事多かりき。人生は神が玩弄する為に製作したる諧謔にあらざるやとは、彼がその頃胸間に往来しける迷想なりき。彼は世を教へんとて、世を救はんとして著作をなせり、然れども著作の真意すでに誤りたれば、世の人はさておき、己れを安むるの効もあらず。彼は悲しめり、然り、彼は迷想の極にのほりて、今は自殺の外に、万事を決し疑惑を解くものあらずなりぬ。然れども伯は闇冥さんめいなる迷想の中より、生活の一秘鑰ひやくを覚りはじめたり。「神よ爾は我等を爾の為に造りたまへり、故に我等は爾を得るまでは我等の心に安みを得る能はず」と言へりしアウガスチンの言葉は、同じくトルストイの言はんと欲せしところならむ。彼は漸く教義を探り、この中に安慰を求めんとしたりしが、この事も亦た彼を失望せしめたり、教にありて世を渡るといふなる信者づれも苟且の思ひ定めにて、たしかに己れの生涯をしかなさんとはあらざるを知りたればなり。彼は遂に、農民の生活をもて尤も能く己れの疑惑を解くものとせり。神の意に従へる生活は一の意味を有せり、自からは我が業の目的如何なるを弁へずと雖、これを用ゆるの主には大なる目的あり。トルストイ伯曰く「神を知ること、生命いのちとは一にして離るべからざる者なり。神は生命なり。神を求むるを主つとむべし、神なくして生命ある事能はじ」と。



引用が長くなったが、後半の宗教的覚醒の部分が透谷のそれと酷似しているように思えたので省かなかった。

先の「三日幻境」に、「天地の間に生れたるこの身を訝かりて、自殺を企てし事も幾回なりしか」とあったように、トルストイの思想遍歴は北村透谷とかなり重なっている。ゆえに、「神を知ること」と「生命」とは一つである、というトルストイの言葉に透谷は鋭く共鳴し、これがのちの「内部生命論」にそのまま繋がったのであろう。

人生の意義を見失って「自殺」を考えたトルストイは、「神の意に従へる生活は一の意味を有せり、自からは我が業の目的如何なるを弁へずと雖、これを用ゆるの主には大なる目的」あることを覚り、教会ではなく農民たちの素朴な生活に救いを見出した。これに対して透谷は、そのような〈神の意志〉を宇宙の中心に存在する〈生命〉の営みと捉え、その根源的な〈生命〉を「感応力イインスピレーション」で捉えることが「詩人」の使命であると、「内部生命論」で論じている。一方で、トルストイが農民の生活に意義を見出したように、透谷は徳川氏時代に声を上げ始めた「民」・「平民」の勃興に意義を見出していった。

周知の通り「内部生命論」（明治二六年五月三十一日、「文学界」五号）は、透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（明治二六年二月二十八日、「文学界」二号）から始まった山路愛山との論争、いわゆる人生相渉論争の流れで生れてきた論文の一つである。また、民友社の総帥・徳富蘇峰の文章に対抗する意図が明白に表れたものでもある。<sup>(3)</sup>

けれども、そういう俗事の影響を受けていながらも「内部生命論」は、北村透谷を代表する思想論文足り得ている。それは透谷が、宗教・思想・文学等すべて含めて「人生」として何が一番大切なのかを「内部生命論」で明らかにしているからだ。その内容の是非ではなく、透谷はここで初めて、自分の思想の〈核〉を表現し得たことが重要である。

「内部生命論」の意義を考察する前に、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」に触れて置かねばならないが、この評論の白眉は、松尾芭蕉の「明月や」の句の壮大な拡大解釈にあるだろう。

「芭蕉より其詞句の一を仮り来つて、わが論陣を固むる」として、

明月や池をめぐりてよもすがら

この「簡明なる一句」を「空の空の空を撃つて、星にまで達」せんとする名句として最大限に称揚した。

この句の主体・主人公の設定を透谷は恣意的に作り変え、さらなる設定を塗り重ねていく。透谷が塗り直した〈彼は、〝人世に相渉るの事業に何事をも難しとするところ〟のない実世界の勝利者であるにもかかわらず、それで満足することが出来ない人間、とされる。そこで彼は「実を撃つの手を息めて、空を撃たんと悶きはじめ」、ついに「池」を〈睨みて〉よもすがら周回することになる。

「再回は池の全面を睨むに足りしかど、池の底までを睨らむことを得ざりしが故に、更に三回めぐりたり、四回めぐりたり、而して終によもすがらめぐりたり。池は即ち実なり。而して彼が池を睨みたるは、暗中に水を打つ小児の業に同じからずして、何物をか池に写して睨みたるなり。何物をか池に打ち入れて睨みたるなり。何物にか池を照さしめて睨みたるなり。睨みたりとは、視る仕方の当初を指して言ひ得る言葉なり。視る仕方の後を言ふ言葉は Annihilation（＝消滅。筆者註）の外なかるべし。彼は実を忘れたるなり、彼は人間を離れたるなり、彼は肉を脱したるなり。実を忘れ、肉を脱し、人間を離れて、何処にか去れる。杜鵑の行衛は、問ふことを止めよ、天涯高く飛び去りて、絶対的の物、即ち Idea にまで達したるなり。」

実世界での成功に満足せず、「池＝実」の世界を「睨らむ」ように観察し、その極、彼が睨んでいたはずの「実」

の世界は消滅し、彼はそれを忘却し、最後には「天涯高く飛び去りて、絶対的の物、即ち Ideas にまで達したるなり」とされる。

「彼は事実の世界を忘れたるにあらず、池をめぐるに再三回するは実を見貫く心ありてなり、実は自然の一側なり、而して実を照らすものも亦た自然の他の一側なり、実は吾人の敵となりて、吾人に迫ることを為せども、他の一側なる虚は、吾人の好友となりて、吾人を導きて天涯にまで上らしむるなり、池面にうつり出たる団々たる明月は、彼をして力としての自然を後へに見て、一躍して美妙なる自然に進み入らしめたり。

サプライムとは形の判断にあらずして、想の領分なり、即ち前に云ひたる池をめぐるにやまずがらせる如き人の、一躍して自然の懷裡に入りたる後に、彼処にて見出すべき朋友を言ふなり。この至真至誠なる朋友を得て、而して後、夜を徹するまで池をめぐるの味あるなり。池をめぐるは Nothingness をめぐるにあらず、この世ならぬ朋友と共に、逍遙遊するを楽しむ為にするなり。

造化主は吾人に許すに意志の自由を以てす。現象世界に於て煩悶苦戦する間に、吾人は造化主の吾人に与へたる大活機を利用して、猛虎の牙を弱め、倒崖の根を堅うすることを得るなり。現象以外に超立して、最後の理想に到着するの道、吾人の前に開けてあり。大自在の風雅を伝道するは、此の大活機を伝道するなり、何ぞ英雄剣を揮ふと言はむ。何ぞ為すところあるが為と言はむ。何ぞ人世に相渉らざる可からずと言はむ。空の空の空を撃つて、星にまで達することを期すべし、俗世をして俗世の笑ふまゝに笑はしむべし、俗世を済度するは俗世に喜ばるゝが為ならず、肉の剣はいかほどに鋭くもあれ、肉を以て肉を撃たんは文士が最後の戦場にあらず、眼を挙げて大、大、大の虚界を視よ、彼処に登攀して清涼宮を捕握せよ、清涼宮を捕握したれば携へ歸りて、俗界の衆生に其一滴水の水を飲ましめよ、彼等は活きむ、嗚呼、彼等庶幾はくは活きんか。」

「明月や池をめぐりてよもすがら」という十七文字をもとに、これだけ広げ切った議論展開を行なった人間は、おそらく北村透谷だけだろう。「虚」を友とし「想」の力で、最後には「眼を挙げて大、大、大の虚界を視よ、彼処に登攀して清涼宮を捕握せよ」と、透谷は叫ぶ。

山路愛山の「頼裏を論ず」（明治二六年一月、「国民之友」）の冒頭部、「文章即ち事業なり。文士筆を揮ふ猶英雄劍を揮ふが如し。共に空を撃つが為に非ず為す所あるが為なり」「華麗の辞、美妙の文、幾百巻を遺して天地間に止るも、人生に相渉らずんば是も亦空の空なるのみ」という文章に反発し、肉眼では見えない、天地自然・宇宙の真理に「想」の力で迫ろうとする〈真正の詩人〉の、絶対的意義を透谷は主張する。

この後、愛山の「明治文学史」（明治二六年三月～五月）が出ると、「明治文学管見（日本文学史骨）」（明治二六年四月～五月、四回、「評論」）で対抗するなど、当時の北村透谷は、山路愛山と徳富蘇峰の文章・思想に対する敵愾心が強い執筆動機となっていたようだ。

「明治文学管見」の第二章「精神の自由」で透谷は、「人生は文学史の中に其骸骨を留むるものなり、その宗教も、その哲学も、文学史の中に散漫たる形にて残るもの也、その欲望も、其満足も、文学史の上には蔽ふべからざる事実となるなり、而して吾人は、その欲望よりも、其満足よりも、其状態よりも、第一に人生の精神を知らざるべからず、吾人は観察なるもの、甚だ重んずべきを認む、然れども状態<sup>ステート</sup>を観察するに先ちて、赤裸々の精神を視ざるべからず、認識せざるべからず」と書く。

この「精神」が、「虚界」にある「清涼宮」と同じものなのか判別は難しいが、透谷が「精神は終古一なり」と言うときすでに、彼の中には「内部生命論」の〈核〉である、「神」のみが介入できる「根本の生命」の観念が生れていたと見るべきであろう。

「明治文学管見」では、「精神」という言葉で表現された観念がどういうものなのか。次の「内部生命論」（明治

二六年五月)で、透谷は解き明かそうとした。結果としてそれができたかどうかは措いて、一筋の明確な論理によってそれが説明されていることは確かだと思われる。

### 三 「内部生命論」

実は、「内部生命論」が持っている論理はシンプルで、それまでの文章で透谷が使用してきた論理と何ほどの違いもない。けれども「人生に相渉るとは何の謂ぞ」では、観念的なキーワードの言い替えや当を得ているかどうか疑わしい例示、論理展開の途中での論争相手を意識した罵倒などが散見されたけれども、「内部生命論」においては一つのテーマ・主張が一貫していてブレがない。またそれを順々に説いていく姿勢を堅持している。

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」は、芭蕉の句の拡大解釈が象徴するように、実用主義・実績主義による文学解釈への反発で我を見失い、必要以上に虚界・想世界の存在と価値を誇張し過ぎていた。

「明治文学管見」の「精神の自由」は、透谷にとつての歴史・文学史を解釈する上での基準を示そうとしたものだ、ということとは理解できる。しかし、啓蒙家の福沢諭吉・中村敬宇のあと、明治一〇年代に鬱勃たる機運のもとに起った自由民権運動の叙述に入る寸前で中断した為に「精神の自由」の価値と意義は宙に浮いてしまった。

もし続きが書かれていれば、民権運動と文学との関係、その後の政治小説の流行などを透谷はどう評価しただろうか。そして何より、透谷自身がそうであったように、明治の文学はダンテ、シェークスピア、ゲーテ、バイロン等の西洋文学の影響を強く受けて成立したものである。この事実を透谷はどう説明し評価したのだろうか。

次の「内部生命論」で透谷は、「詩人」が取り上げるべきテーマは何か、の一点に絞って論を展開する。長くなるが、冒頭部から端折らずに見ていこう。

「内部生命論」の冒頭は、〈造化＝天地自然〉と〈人間の心理〉の関係について説く。

「造化」は「常久不変」であるが、それを見る人間の心理によって「趣を変」える。仏教的に見れば「無常的厭世的」に、基督教的に見れば「有望的樂天的」に見える。「造化」は人間を「支配」するが、人間はその支配に「黙従」してはいない。人間の中には「自由の精神」があるからだ。

そういう人間は、果たして「生命の泉源」たる永久不死の「生命」を「享有」しているのだろうか。「五十年の人生の為に五十年の計を為す」だけが人生ならば、それがどんなに「大に、密に、妙に、精」であつても「計なき」方がましである。五十年のうち「二十五年を労作に費し、他の二十五年を逸樂に費やすとせば、極めて面白」いが、「實際世界は決して斯の如き夢想を容るゝの余地」を与えない。「五十年の人生の外はすべて夢なり」と分かっているならば、自分は「勤勞を廢し、事業を廢し、逸樂晏眠を以て残生を送る」ことだろう。

意識してみるとこんな具合になる。そして、この「内部生命論」で示された北村透谷の思想的基盤をまとめておくと、次のようになるだろう。

「人間は肉体的・現実的に時空に束縛された五十年の人生だけを生きるのではない。おそらくは「神」が司る永久不死の「生命」が宇宙の中心にあつて、「無絃の琴」を奏でている。その大いなる意志が宇宙を、天地自然の運行を、人間の営みを支配・制御している。この宇宙の「秘奥」にある、すべての根源である「生命」の声を、姿を、意志を感じ得るのは人間のみ。人間が生れる遙か昔から存在し、人間が死んだあとも存在し続ける「根本の生命」、その存在を感じ得し、確認し、その意志の示すところを人間界に伝えるのが「真正の詩人」の役割である。」、ということになるだろう。

「吾人は人間に生命ある事を信ずる者なり」、キリスト教の説く「生命思想を以て」東洋的な「不生命思想を滅

せんとするものなり」、そもそも「東西二大文明の要素は、生命を教ふるの宗教あると、生命を教ふる宗教なきとの差異あるのみ」、「宗教としての宗教、彼れ何物ぞや、哲学としての哲学、彼れ何物ぞや、宗教を説かざるも生命を説かば、既に立派なる宗教にあらずや、哲学を談ぜざるも生命を談ぜば、既に立派なる哲学にあらずや、生命を知らずして信仰を知る者ありや、信仰を知らずして道德を知る者ありや、生命を教ふるの外に、道德なるもの、源泉ありや」。

論の中盤から、「生命」・「根本の生命」が多用されるのは、透谷が「内部生命」インナーライフと呼ぶ、人間の内部にある一種の精神共鳴器官が、宇宙の中心にある「根本の生命」と共鳴し、時には「感応」インスピレーションによって交信さえできる、そのことの価値と意義を出来るだけ強調するためであろう。

これだけが「内部生命論」の論理であり、テーマであり、思想のすべてと言ってよい。続けていこう。

「文芸」について言えば、「文芸は宗教若しくは哲学の如く正面より生命を説くを要せざるなり」、また「すべての倫理道德は必らず、多少、人間の生命に關係ある者」であるが、徳川氏時代の「儒教道德」は形式に流れてしまった。「之を要するに其の教ふる処が、人間の根本の生命の絃に触れざりければなり。」当時の美文家の多くは、卑下なる人情の写実家で、「肉情よりして恋愛に入るより外には、愛情を説く」道が無く、「プラトーの愛情も、ダンテの愛情も、バイロンの愛情も、彼等には夢想だもする」ことはできなかった。彼らは「忠孝」「節儀」「善悪」を説くが、「人形を并べたるものにして、人間の根本の生命の絃に触れたる者」ではなく、「勸善懲惡」にしても「真正の勸懲は心の経験の上に立たざるべからず、即ち内部の生命の上に立たざるべからず」、と言う。

また、「厭世詩家と女性」以来、変わらず「恋愛」は「根本の生命」に触れることの出来る重要な「鍵」である。



「吾人は人間の根本の生命に重きを置かんとするものなり、而して吾人が不肖を顧みずして、明治文学に微力を献ぜんとするは、此範圍の中にあることを記憶せられよ。」

「若し夫れ人間の根本の生命を尋ねて、或は平民的道德を教へ、或は社会的改良を図る者をしも、ベベルの高塔を砂丘に築くものなりと言ふを得ば、吾人も亦たベベルの高塔を築かんとする人足の一人たるを甘んぜんのみ。」

「善と言ひ、悪と言ふも元より道德学上の製作物にあらざること明らかなり。究竟するに善惡正邪の區別は人間の内部の生命を離れて立つこと能はず、内部の自覺と言ひ、内部の経験と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。」

「詩人哲學者の高上なる事業は、実に此の内部の生命を語るより外に、出づること能はざるなり。内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり、詩人哲學者の爲すところ豈に神の業を奪ふものならんや、彼等は内部の生命を觀察する者にあらずして何ぞや。」

「彼等が内部の生命を觀察するは、沈靜不動なる内部の生命を觀るにあらざるなり、内部の生命の百般の表顯を觀るの外に彼等が觀るべき事は之なきなり」、「人間の内部の生命を觀ずるは、其の百般の表顯を觀ずる所以にして、靈知靈覺と觀察との相離れざるは、之を以てなり。靈知靈覺なきの觀察が眞正の觀察にあらざること、之を以てなり。」

「詩人哲學者は到底人間の内部の生命を解釈するものたるに外ならざるなり、而して人間の内部の生命なるものは、吾人之れを如何に考ふるとも、人間の自造的のものならざること信ぜずんばあらざるなり、人間のヒューマニチー即ち人性人情なるものが、他の動物の固有性と異なる所以の源は、即ち爰に存するものなるを信ぜずんばあらざるなり。」



「内部の生命」が人間に備わっているとすれば、それは人間が自ら作り出したものではないことは明らかである。つまり、「神」のような存在から授けられたとしか考えられない、と透谷は主張する。

「道は邇<sup>ちか</sup>きにありと言ひたるもの、即ち、人間の秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を説きたるもの、即ち生命の泉源は人間の自造的にあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして、天下豈、人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信ずるものにあらずして、真正の人性人情を知るものあらんや。」

「瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是なり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは云ふなり、而して吾人は、真正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には、之なきを信ぜんとする者なり。」

「畢竟するにインスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるなり。吾人の之を感じるは、電気の感応を感じるが如きなり、斯の感応あらずして、曷ぞ純聖なる理想家あらんや。」

この「感応は人間の内部の生命を再造する者なり、この感応は人間の内部の経験と内部の自覚とを再造する者なり。この感応によりて瞬時の間、人間の眼光はセンシユアル・ワールドを離る、なり、吾人が肉を離れ、実を忘れ、と言ひたるものに外ならざるなり、然れども夜遊病患者の如く「我」を忘れて立出づるものにはあらざるなり、何処までも生命の眼を以て、超自然のものを観るなり。再造せられたる生命の眼を以て。」

「内部生命論」は明確な論理で書かれていると述べたが、それは以上の引用のように、すべてを「内部の生命」と「根本の生命」、それを繋ぐ「インスピレーション」に帰している点が明確だ、という意味である。

「内部の生命」とは何か、「根本の生命」とは何か、両者の関係とは、などの疑問に北村透谷が論理的・具体的に答えているわけではない。最後の方で、そう信じる、そう信じざるを得ない、等の言葉が多くなるのも論理的・客観的に「内部生命」・宇宙の根源的「生命」を捉えているわけではないためであろう。

しかしそれにもかかわらず、「内部生命論」には読む者を説得する何か、オーラののようなものが感じられる。

それはなぜかという答えを簡単に言ってしまうと、透谷の思想基盤である「内部の生命」と「根本の生命」、それをつなぐ「インスピレーション」の力、この三つの存在と機能が、もし透谷の主張通り、信じている通りであったとしたならば、透谷の思い描く「人生の理想」が本当に実現してしまうように思えてくるからだ。

この魅力的な前提を疑ってかかつては意味がない。この三つは存在し、機能しているのだと信じたならば、人間の人生には大いなる意義が生れ、人間は「宇宙の意志」と繋がる存在となり、「孤独」ではなくなる。「死」を恐れる必要も無くなってしまう。自分の出生と死、その間の人生は「大いなる意志」(＝神)への祈りや奉仕という性質のものになり、実世界での悲哀や苦悶を相対化し、「死」への恐怖を大きく和らげてくれることだろう。

前述した「トルストイ伯」に見られた思想的・宗教的感覚を、透谷は「内部生命論」で自分なりに敷衍し、完成してみせた。たとえ民友社系論者への対抗心から生まれてきたものだとしても、北村透谷はここで、人生の意義、詩人・文学者の価値について堂々たる「答え」を提示し得ているのだ。

その事実が、北村透谷が生きて、人間と文学ために戦ったその人生の価値を保証しているように思える。

#### 四 透谷の死 (付論——Kの死)

冒頭では意識的に触れなかったが、北村透谷と『こころ』のKの自殺にはもう一つの共通項がある。

それは「恋愛」である。

Kの場合は分かりやすい。それが自殺の直接原因であるかは微妙だが、契機となったことは確かである。実は『ころ』において、明らかに「恋愛」に囚われたのは、先生ではなくKの方である。

彼は元来無口な男でした。平生から何かいおうとすると、いう前によく口のあたりをもぐもぐさせる癖がありました。彼の唇がわざと彼の意志に反抗するように容易く開かないところに、彼の言葉の重みも籠っていたのでしよう。一旦声が口を破って出るとなると、その声には普通の人よりも倍の強い力がありました。

彼の口元をちよつと眺めた時、私はまた何か出て来るなとすぐ疳付いたのですが、それがはたして何の準備なのか、私の予覚はまるでなかったのです。だから驚いたのです。彼の重々しい口から、彼のお嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像してみてください。私は彼の魔法棒のために一度に化石されたようなものです。口をもぐもぐさせる働きさえ、私にはなくなってしまったのです。

（「先生と遺書」三二六）

夏目漱石も「恋愛」を描く場面では「魔法棒＝マジックステッキ magic stick」という、「オズの魔法使い」や「シンデレラ」に登場するような言葉を使用していて興味深い。Kはまさしく「恋愛」という「魔法」をかけられた状態にあり、このあと自分の告白に無我夢中で、聞き手の先生のことごまかすべく見えていない。

「厭世詩家と女性」で透谷は、こう書いている。

恋愛なる一物のみは能く彼の厭世家の呻吟する胸奥に忍び入る秘訣を有し、奇しくも彼をして多少の希望を起さしむる者なり。情の性は沈静なるを得ざる者なり、其の一たび入るや人の心を攪乱するを以て常とす。況してや平生激昂しやすき厭世家の想像は、この誠実なる恋愛に遭ひて脆くも咄嗟の間に、奇異なる魔力に打ち勝た

れ、根もなき希望を醸し来り、全心を挙げて情の奴とするは見易き道理なり

この「厭世家」がKであったとしても何の違和感もない。まさに「心を攪乱」され、「奇異なる魔力に打ち勝たれ」、「全心を挙げて情の奴」となっている。

Kの遺書は「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺する」という内容だったとされるが、「薄志弱行」を決定づけたのは「恋愛」である。「恋愛」により感情のコントロールを失ったKは、先生だけにその混乱した姿をさらけ出してしまふ。もしかするとその時の無様な自分を見られた、という羞恥心が「自殺」に大きく関与したのかもしれない。

透谷の場合は、説明が必要だろう。自殺した当時、透谷は「恋愛」状態ではなかったはずであるから。けれども、それだからこそ「恋愛」が「自殺」の一因になり得たと、私は考える。

北村透谷は二〇歳前後のころ、妻となる石阪美那子との情熱的な恋愛経験を持つている。それが「厭世詩家と女性」を書く大きなモチーフとなったのだが、その内容は「恋愛」が「婚姻」に移行した時に厭世詩人が味わう幻滅についてであった。「恋愛」時代には恋人から得られた〈癒し〉が妻となった女性からは得られなくなってしまう。

透谷は、著名な詩人たちの女性に対する罪業をあげつらいながら、「詩人」ととしての女性と「恋愛」の価値を少しも疑ってはいない。「内部生命論」でも、徳川氏時代の作家たちが「恋愛」を、「真の愛情」を知らずに貶めていることを痛烈に批判している。

透谷の思想的基盤として重要な、人間のもつ「内部の生命」と宇宙の中心にある「根本の生命」をつなぐものは「インスピレーション」であるが、その力を使わずとも、また内部と外部との「生命」など知らずとも、強制的に〈宇宙の真理〉に触れさせられるのが「恋愛」だと、透谷は考える。

どんな人間でも、真の「恋愛」に陥れば、宇宙の「真理」に触れ、天地自然の「美」を発見し、そして「魂の救済」を得る、透谷はそう考えていた。

特に「厭世詩人」は現実世界との折り合いが悪く、不平不満を鳴らし社会から孤立してしまう。「実世界」との戦いに疲れ、敗れた「詩人」を癒すのは、「想世界」に羽ばたく「精神」の力と、「恋愛」対象の「女性」である。

恋愛時代の明治二〇年八月一八日付「石坂ミナ宛書簡」は、「生のミザリイを聞いてたも」という甘えたお願いで始まり、それまでの北村門太郎の経歴が主観的に綴られている。自分の「惨苦」に満ちた人生を披瀝して、同情と慰めを期待していることは明白である。

紆余曲折を経て、どうにか結婚に至った二人は、もう恋人ではなく、夫と妻となる。子供が出来ると父と母となり、透谷は一家の稼ぎ手として頼られ、責任を持たされるようになる。妻の富裕な実家からの援助はなく、「勤め」に向かない性格の彼には、家計のやり繰りは難しく、家のことは妻まかせの典型的な夫だったようだ。

結婚して五年経った明治二六年八月下旬（推定）の「北村ミナ」宛書簡草稿には、「おんみの語気つねにわが意気地なくして、金を得ること少く、世にいづることの遅く、居るところの幅狭きを責むることく聞ゆ。」という、恨み言まで出てきてしまうようになる。

この書簡草稿で、透谷は次のように述べている。

「人生の不調子なる、不都合なる、誰か知らざるものあらん。しかるにこれを聖境となさんとする、誰かその愚を知るものぞ。聖境他にあり、人界は苦境なり。誰かこれを慮らざるべき。悲しいかな、昨日公家の娘、今は貧詩人の妻となりしを。」

「聖境他にあり」、「人界は苦境なり」という言葉は、「厭世詩人」としての北村透谷の基本スタンスである。

実世界での成功に幾度かチャレンジしながら、すべて跳ね返された透谷にとって、妻・母としての美那子からの期待と要求は過重な負担としか思えなかったであろう。

以上のように、明治二六年の八月ごろには、過去に「恋愛」対象であった女性からは「癒される」どころか、「責められる」ようにまでなっていた。またこの頃、「哀詞序」（明治二六年九月九日、「評論」一二号に発表）という追悼の文章を書きかけて、けれどその本文が涙で書けないほどの衝撃を受けた異性の朋友の死<sup>1</sup>もあり、この頃から透谷の精神に暗雲がかかった可能性は高い。

透谷の自殺の一因として「恋愛」を挙げたのは、透谷が自分の中にある「内部の生命」と宇宙の中心にある「根本の生命」とが共鳴する実感を、しかも幸福な実感を持てたのが、美那子との「恋愛」経験だけだっただろうと考えるからだ。「内部生命論」等で、いくら言葉で力説しても、それは説明ができるだけで「生命」の存在を実感できるわけではない。また「天啓」なり「冥契」が必要な「インスピレーション」がたやすく湧いてくるはずもない。それができるのは「ジーニアス」の「詩人」たちだけだと考えると、気力が萎えるようになっていったのではないだろうか。「恋愛」がもたらす影響を「厭世詩人と女性」（明治二五年二月）は、「夫れ恋愛は透明にして美の真を貫ぬく、恋愛あらざる内は社会は一個の他人なるが如くに頓着あらず、恋愛ある後は物のあはれ、風物の光景、何となく飯を去つて実に就き、隣家より我家に移るが如く覚ゆるなれ」と書いている。

「恋愛」によつて、よそよそしい「社会」は身近になり、万物・自然の美も実感として目に映るようになる。「内部生命論」の言葉を借りればそれは、自己の「内部の生命」が宇宙の中心にある「根本の生命」と反響し合った結果、同じく「内部の生命」を持つ人間はすべて他人ではなくなり、同じく「根本の生命」のもとで運行している天地自然も他者ではなくなり、社会や自然に対して真のシンパシーが持てるようになるからだ、と説明できるだろう。

この点から透谷の自殺の原因について考えると、まず新たな「恋愛」の可能性を自ら否定した、という事があるだろう。「厭世詩家と女性」に掲げられているように、バイロンはじめ結婚生活を全うしなかった「詩人」は数多い。透谷がこのような「厭世詩家」であるならば、離婚して女性を暗涙に咽ばせることも理屈の上では出来たはずである。

それが出来なかったのは「人界」「俗界」における夫婦生活の幸福を、透谷自身が心の底では願っていたからだろう。この場合、理想的な人生は、透谷の書くものが評価され、お金になり、それによって「家庭の幸福」が築かれるというものだが、それが実際にはまったく上手くいかなかった。この点では対照的に、後輩の島崎藤村の人生設計の方が見事なものだった。

また、初期の『伽羅枕』及び『新葉末集』（明治二五年三月）や「歌念仏を読みて」（明治二五年六月）のような、具体的な文学作品論に「恋愛」をからめる手法を晩年の透谷は取らなくなっていく。最後の方は、自身の小説や戯曲の構想・執筆すら億劫になっていったように見える。

元来、身体が弱く大人しいタイプであった透谷は、それを旅と放浪、それに気力と気概で払拭し、人生の活路を開いてきた。自殺の理由はさまざまあるだろうが、一番の理由は「生きる気力の減退」だと思われる。

執筆・創作にせよ、家族・朋友とのコミュニケーションにせよ、晩年は「投げやり」になっていたようだ。そうなった原因は、自分の思想にも、詩人・文学者としての未来にも「希望」が持てなくなったせいだと考えられる。

透谷の思想にとって「恋愛」「インスピレーション」は不可欠だが、それが容易に見出せない。創作や評論の筆も鈍りがちになる。不眠症になる。そんな状態の中での、突発的な自殺衝動が不幸にも実ってしまったのではないだろうか。

『いころ』のKの自殺は「理想」に近づけない自分を自罰的に処断した、とも受け取れる。しかしKは、透谷の憧

れる「恋愛」状態に入ることができ、たとえそれが実らなくとも、「恋愛」をする自分を認める発想を持てさえすれば自殺する必要はなかったはずだ。その方向性を塞いでしまったのが親友の先生である。そんな「罪深い」としか言いようがない所業を悔いる物語であった。

北村透谷の〈死〉は、他者の介在しない〈自死〉であったことに特色がある。

『春』によって認知された北村透谷は、昭和期に入って高い評価を得るようになった。最後の自殺のあり方を含め、彼の文学・人生からは、いまだに汲み取るべきものが多い。

(二〇二三年九月二一日稿)

(注)

- (1) 平岡敏夫『北村透谷研究 評伝』(一九九五年一月、有精堂)
- (2) 島崎藤村「北村透谷の短き一生」
- (3) 徳富蘇峰「社会に於ける思想の三潮流」(明治二六年四月、「国民之友」)
- (4) 富井まつ子。明治二六年八月一四日死去。